

板橋宿探訪

—旧中山道を歩く—

An Investigative Visit at Itabashi *Juku*
—along the old Nakasendo—

五島 正夫

神奈川歯科大学 言語情報・人文学講座 英語学分野

Masao Goto

Department of English, Kanagawa Dental University

序

旧奥州街道の千住宿、旧東海道の品川宿、旧甲州街道の内藤新宿と三年に渡った江戸の四宿探訪は、旧中山道の板橋宿を残すのみとなった。今回の集合場所はJR板橋駅東口（滝野川口）であった。昨年（2014.9.13）の内藤新宿はデング熱騒ぎの中での実施であった。今年（2015.9.12）は朝五時四十九分頃の東京湾を震源とする地震（M5.2）で公共交通に影響の出ている中で集合した。探訪経路は、途中日本橋方面に少し上る場所や東に足を延ばすが、基本的にはJR板橋駅東口から環状七号線まで旧中山道を下るコースであった。

板橋宿変遷

板橋宿は、日本橋方面から下宿（平尾宿）・中宿・上宿の三つに分かれ、北区滝野川から環状七号線先までの範囲にわたる。この三宿を総称して板橋宿と呼んだ。東一帯には旧加賀藩前田家の下屋敷があった。付け加えると、上屋敷は本郷にあり、現存する赤門は旧前田家の門でした。中屋敷は駒込にあり、いずれも旧中山道に沿っていた。

天保年間の記録によると、宿場の延長は十五町四十九間（約1.7km）となっている。宿場の中心地

中宿には問屋場、本陣などの施設と高級旅籠、料理屋などが軒を並べ、上宿には大木戸を囲んで商人宿や馬喰（ばくろう）宿が密集していた模様で、宿場入口に近い平尾宿は前二者とくらべ比較的閑散であった。脇本陣はこれら三宿にそれぞれ一軒あった。また、大小四十五軒の旅籠の中には俗に宿場女郎といわれる飯盛女を置く家があった。

明治十七年（1884）、上宿の石田屋より失火した火勢は、旧板橋宿の中心街、上宿、中宿の大半を焼失させた。その後、明治十九年（1886）、北豊島郡役所が、現在の板橋三丁目五番に新築された。これを中心に被災した旅籠業者が平尾に集まり、業種の名前を変え、飯盛女が遊女となって板橋遊廓が形成され、城北の遊び場として繁盛した。しかし、遊郭は、昭前和十二（1937）頃より徐々に衰退し、軍需工場に動員された学徒の宿舎に充てられるため、昭和十九年（1944）にすべて廃業した。

現在の旧板橋宿一帯は、家が立ち並び庶民の街となっているが、注意してみると戦前の工場跡が境界杭等に残されている。石神井川は、昭和四十七年（1972）に改修工事をされて、その兩岸（遊歩道）は四季折々最高の散歩コースを提供している。探訪当日は素晴らしい木陰で迎えてくれた。

近藤勇の墓

探訪一行は、駅前の円形広場を出発し、ダンダラ模様の見えている近藤勇（1834-1868）の墓に向かった。向かって左から順に新選組隊士供養塔、近藤勇の墓、埋葬当初の墓石、近藤勇の石像が並んでいた。

新選組隊長の近藤勇は、慶応四年・明治元年（1868）四月三日下総流山で新政府軍に投降して、当時本営があった板橋宿に連行された。取り調べを受けた後で、近藤勇は四月二十五日に平尾一里塚で斬首の刑を受けた。首は京都三条河原にさらされ、胴は滝野川三軒家の無縁塚に埋葬された。

供養塔は、近藤勇、土方歳三（1835-1869）のほか殉死した隊士の供養のために、新選組隊士・永倉新八（1839-1915）が発起人となり、旧幕府典医松本順（1832-1907）の協力を得て明治九年（1876）に建てられた。近藤勇の墓に「勇生院頭光放運居士」の戒名が彫られていた。赤間倭子（あかましづこ）の『史跡探訪新撰組残照』には、

「朝敵として処断されても、やはり彼の人物の偉さは、敵もみとめていたでしょう。そしてこの戒名をさずけた当時の、寿徳寺住持の方の彼に対する慈悲と冥福を祈るおもいが、よく伝わってきます。勇の一字を入れたいかにも勇武な院号、そして首（頭）を失った悲劇に対して、その頭から発する霊力の光が、運を放って永遠に眠れよという意味だと思います。放運とは良い運を手放したという意味ではありません。頭の光が輝いて良い運を放射するということです。……」注1

と書かれている。戒名の付いた墓の右側に「近藤勇埋葬当初の墓石」と書かれた立札がある。戒名も名前も刻んでいない自然石の墓石は、近藤勇を囲む処刑当時の人々の気持ちをそのまま伝えているように思われた。近藤勇の墓は、板橋の他に三鷹、会津、京都にもある。

亀の子束子西尾商店

墓所から東に向かって進み、旧中山道を日本橋方面に三百メートル程上ると左側に、大正ロマン時

代のレトロな建物が現われた。これが「亀の子束子西尾商店」であった。店の冊子に、「明治四十年（1907）創業当時から、最高の素材と最高の技術でつくられ、創業以来伝統の形状と製法を守り続けている」とある。店の中には、ただ伝統に捉われているのではなく、新しい素材を使った新商品も多く並んでいた。小さなキーホルダー付の束子を探訪の記念に買い求めたが、この小さな束子さえも、見事な作りをしていた。又、束子の入っていた袋も、明治時代を彷彿させるものであった。

旧中山道を下りJRの踏切を渡り、三つ目の信号を右折する（旧中山道から外れる）と中山道（国道17号）に出た。ここを渡ると、加賀公園に至る道はなだらかな下り坂となっていた。

加賀前田家下屋敷跡碑（加賀公園）

下屋敷の平尾邸は、約二十一万八千坪に及ぶ広大な敷地を持つ屋敷であった。邸内には石神井川が流れ、その水流と千川用水の配水を利用した大池が設けられ、築山や立石、滝などが各所に配された池泉回遊式庭園が展開していた。

平尾邸が中山道板橋宿に隣接していることから、参勤交代時に前田家の藩主が休息をとり、江戸へ出入りする際の装束替えの場としても利用された。また、その家族や家臣による送迎の場にもなった。しかし、幕末の嘉永六年（1853）、浦賀沖にアメリカのペリー艦隊が来航してから事情が一変した。江戸防備のため、邸内でオランダ式ゲベル銃を使った訓練が実施され、石神井川の流れを利用して大砲が製造された。明治期以降は、平尾邸の大半は、同じく石神井川の流れを利用して火薬を製造する板橋火薬製造所となった。

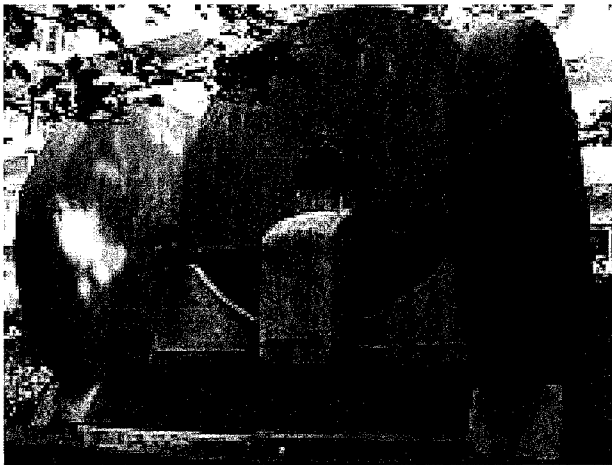
現在この公園には、下屋敷跡碑と板橋区と金沢市の友好交流都市協定締結記念碑がある。江戸の面影を僅かに残すといわれる築山には、コンクリートと煉瓦製の弾道検査標的の遺構がみられた。

加賀公園の木陰でつかの間の休憩をとると、公園を取り巻くように流れる石神井川右岸を遡り、次の探訪地に向かった。平成二十一年（2009）に板橋区

から立川市に移転した国立極地研究所の跡地の記念碑、「南極の石モニュメント」にたどり着いた。一見すると普通の石と変わらない石を撫でて涼を取り、また歩き出した。

圧磨機圧輪記念碑（加賀西公園）

石神井川に別れを告げ、高層マンションが立ち並ぶ迷路をどうにか通り抜けて圧磨機圧輪記念碑に着いた。この記念碑は、板橋火薬製造所の創設者澤太郎左衛門（183-1898）の遺徳を称えるために、大正十一年（1922）に陸軍省が設置した記念碑で、実際に火薬製造に用いた圧輪を使用している。この圧輪は、幕府の命により太郎左衛門が慶応三年（1867）ベルギーで求めたもので、明治九年（1876）より同三十九年（1906）まで黒色火薬の製造時に使用された。この圧輪の動力源に石神井川の水が使われた。



圧磨機圧輪記念碑

東光寺

東光寺は浄土宗、丹船山薬王樹院と号す。創建年次は不明であるが、延徳三年（1491）入寂した天誉和尚が開山したといわれる室町時代からの寺である。もと船山という所にあったが、船山の地が加賀前田家に下賜になったため中山道沿いの地に移転した。

境内には、関ヶ原の役で西軍の総帥となり徳川家康と戦った宇喜多秀家（1572-1655）の墓がある。戦敗れて後薩摩の島津家に逃れて処刑をまねがれたが、慶長八年（1603）駿河の久能山に幽閉され、つづいて同十一年（1607）八丈島に流された。

明治三年（1870）十一月、秀家の子孫七十一人が内地帰還をゆるされて前田家に寄留した。遺族は先祖秀家の墓をこの板橋に安置し定住した。墓はもと今の板橋税務署付近に祀られていたが、戦災跡地の区画整理に伴って現在の地へ移された。

六道利生地蔵は、通称 平尾追分地蔵といい、道中の守護をしていた尊蔵で、享保四年（1719）に建立された。このお地蔵は、平尾追分に安置されていたが、明治に入り当寺に移された。

民俗信仰「庚申待」は遠く平安朝時代より行われていたが、江戸では元禄年間の頃より盛んとなり、各地に残る庚申塔もこれ以降のものが多し。しかし、東光寺のこの庚申塔は寛文二年（1662）五月に建立された。この庚申塔は、東光寺第八世住職三誉上人や本村市右衛門らが願主となっている。その碑形は笠付で、正面中央には青面金剛立像が陽刻され、上から日月、二童子、二邪鬼、四夜叉、一猿一鶏が見事に刻まれた秀作で、当時の宿場繁栄と豊かな財力をうらづける文化財となっている。右面には三誉上人と平尾名主市右衛門、加賀屋次郎兵衛、同藤左衛門の名があり、左面には伊勢津山口伊右衛門、同州佐藤六兵衛、武州作兵衛の建立者名が刻まれている。この塔は、区内の青面金剛立像が陽刻された庚申塔としては、次に訪ねる観明寺の寛文元年（1661）の庚申塔に次ぎ古い。今回の探訪でこの庚申塔は、印象に残った物の一つであった。

観明寺

東光寺を左に出ると、国道17号と旧中山道が斜めに交差する地点（旧中山道と旧川越街道の追分）に出た。旧中山道を百メートル程下った右に観明寺の朱塗りの山門が見えた。観明寺は真言宗豊山派の寺で、如意山観明寺と号す。御本尊は正観世音菩薩で、創建年代は暦応元年（1338）と伝えられている。『新編武蔵風土記稿』には、延宝五年（1677）十月に入寂した慶浄が中興開山とある。不動三尊像は延宝二年（1674）の作で、明治六年（1873）当時の住職照秀和尚は、町の繁栄祈願のために、千葉の成田山新勝寺から不動尊の分身を勧請した。正面の建物は、

左手が不動堂、右手が本堂でその間に入口がある。

参道の入口に、区内最古の庚申塔が建っていた。笠付の形は東光寺のそれと同形であるが、建立年次は寛文元年(1661)八月のもので一年古い。碑面は青面金剛、日、月、雲、一鶏、一猿、二鬼、二童子が陽刻されている。

稲荷神社は、加賀下屋敷に祀られていたお堂を移築したものである。このお堂の建築は手のこんだ樺造りのみごとなもので、正面欄間の竜の彫刻は左甚五郎作と伝えられる。お堂の周りには以前の繁栄の名残を示す石の柵柱がめぐらされていた。

朱塗りの山門も稲荷神社同様に加賀下屋敷の通用門を移築したものである。

観明寺の山門を出ると直に豪華な造りの現在も営業中の銭湯「花の湯」が出現した。立派な唐破風銭湯で、松の葉と二羽の鶴を描いた懸魚(げぎょ)もすばらしく、その下に取り付けられた蛙股も木製の重厚なもので、昭和四十二年(1967)に宮大工が建てた。

平尾宿の脇本陣跡

「花の湯」の手前を右折すると平尾宿脇本陣跡碑があった。平尾宿脇本陣跡は、一本の石柱の碑のみであった。平尾宿の脇本陣は代々豊田家がつとめ、豊田市右衛門を世襲し名主も兼ねた。近藤勇が、処刑日までの約三週間監禁されていたのがこの豊田家であったといわれている。また、江戸時代に見世物となったベルシャ産のラクダが逗留したこともあった。

いたばし観光センター

センター長さんをはじめとする職員の方々や観光ボランティアの方々が、探訪一行を出迎えて対応をしてくださった。説明の担当者に専門的な質問をする人が多かった。この観光センターは区内の名所、旧跡など板橋の魅力をPRするパンフレットの配布や観光グッズの販売をしている。既に訪ねた東光寺の庚申塔のレプリカやこれから訪ねる縁切榎の初代縁切榎等の歴史資料が展示されている。観光センターは板橋区の文化の発信拠点のように感じられた。

観光センターでいただいた「いたばしまちあるきマップ」と手で色付けされた「中山道板橋宿跡繪圖—大正初期より昭和の初め頃までの町並みの様子—」は、現在の街並を理解する上で貴重な資料となった。

遍照寺

観光センターを後にして王子新道を横切り、お祭りの真っ直中の仲宿商店街(旧中宿)に入った。すぐ右側に遍照寺の白っぽい花崗岩の門柱が見えた。これが遍照寺で、境内には、旧宿場時代の馬つなぎ場のあとであり、明治四十年代まで馬市が開かれていたという。境内には「現在本堂新築準備中」の掲示があり、寛政十年(1798)建立の馬頭観音像や墓石等が寺のなごりをとどめていた。

遍照寺を出て、両側に商店が並ぶ旧中山道をしばらく下った。当日は氷川神社のお祭りで法被姿の人々が闊歩していた。また、子供神輿が通り過ぎるのを待ったりして、お祭り気分の探訪となった。

板橋宿本陣跡

板橋宿の本陣は、代々飯田新左衛門家がつとめ、その邸は建坪九十七坪、門構え玄閤付であったことが天保の記録に残されている。飯田家の宗家、中宿の名主家より宝永元年(1704)に分家した。宿場本陣は、通行する大名・公卿などの宿泊施設で、この本陣あるいは脇本陣に宿泊しようとする大名は、その予定日を前もって通達しておく。本陣ではその利用日の日付と宿泊者名を桧板に墨書した席札を準備し、当日は宿場出入口と門前に掲示して明示した。

旧水村玄洞宅跡

板橋宿本陣跡碑の真向いには、高野長英(1804 - 1850)のゆかりの地である「旧水村玄洞宅跡」の立札が見えた。高野長英は、弘化元年(1844)の六月に「蛮社の獄」で収監されていた小伝馬町牢屋敷から「切り放し」を利用して逃亡した。脱獄後の一ヶ月は幕府の探索にも拘わらず消息不明であったが、七月下旬のある夜、板橋の医師水村玄洞宅を訪れた。水村玄洞は身の危険を知らながら、一兩日高

野長英を奥座敷に匿った。七月晦日の深夜には、北足立郡尾間木村（現さいたま市）に住む実兄の医師高野隆仙（1810-1859）宅に向けて長英を逃れさせた。なお、高野隆仙は長英を匿った容疑で捕えられ、拷問による臀部の傷創が悪化し、四十九歳で安政六年（1859）十月死亡した。水村玄洞と長英の関係は玄洞が長英の門人であった。水村玄洞について、吉村昭著の『長英逃亡』（1984）の中では、

「……水村家は、代々の医家で、玄洞は、板橋で医業を開業していた。蘭学に強い関心をいだいて長英に師事し、長英も水村の家に泊り、こわれて詩を書き与えたこともある。水村は長英が投獄されたことを嘆き悲しみ、前年の正月には、牛込の漢方医加藤宗俊がおしすすめていた長英の減刑赦免運動にも加わり、熱心にうごきまわった。水村は医家であるとともに茶の湯で一家をなしている趣味人でもあった。……」注ii

と書かれている。現在、旧水村玄洞宅は石神医院となっている。

文殊院

文殊院は真言宗豊山派、幡場山大聖堂と号す。江戸初期に本陣飯田家の菩提寺として、昔から信仰を集めていた延命地藏尊の境内をひろげて建立された。開山は、寛永二年（1625）に入寂の権大僧都慶恵と伝える。本尊の文殊菩薩坐像は、寛文年間（1661-1673）の作と伝えられる。文殊院は、天保六年（1835）に全焼し、安政以降正住職を置かず赴任する仮住職も短期間で他の大寺へ赴任するので出世寺とも呼ばれた。山門脇に延命地藏堂、境内に閻魔様を祀る閻魔堂、足腰の守り神の子の権現堂がある。墓地には史跡として有名な宿場時代の遊女の墓や飯田静の墓がある。静は加賀下屋敷に蟄居していた六代藩主吉徳（1690-1745）の七女祐仙院に仕え、愛遇されていたと言われている。本堂には、板橋七福神の毘沙門天が奉安されている。探訪一行に特に人気があったのは、墓地内の四国八十八ヶ所「お砂踏み」であった。多くの方が納札を求めて、巡礼の後に納めた。

中宿脇本陣跡碑

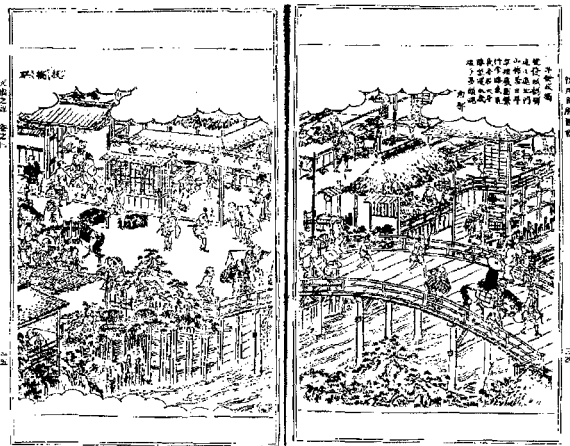
中宿脇本陣は、代々、宇兵衛家を世襲し、板橋宿中宿名主を務めた脇本陣飯田家の屋敷跡。文久元年（1861）には十四代将軍徳川家茂へ降嫁する皇女和宮（1846-1877）が宿泊し、また明治初年に大宮氷川神社に行幸する明治天皇が休憩した。

板橋

脇本陣飯田家の屋敷跡から旧中山道に出ると、わずかに下る坂の先に「板橋」が見えてきた。旧中山道筋石神井川に架けられた「板橋」は、江戸以降、地名、宿名、町名から区名にまで冠称された地名発祥地とされている。宿場当時は、この橋を中心に上・中両宿の繁華街が続いていた。この付近に自身番がありその向い側の橋の袂に高札場があって、公用の告示・訓示の高札がかけられていた。

江戸時代の「板橋」の様子を知る、唯一の文献に『江戸名所圖會』（天保五・七年、1834・1836）所載の長谷川雪旦（1778-1843）の画く「板橋乃驛」注iiiがある。この絵は中宿から上宿方向を描いたもので、当時の宿の繁盛がしのばれ、描かれている人物にも活気がうかがわれる。江戸時代の本製の太鼓橋は、およそ二十年で架け替えられたといわれる。中央部の盛り上がりは、明治の八年頃の写真にはあったが、架け替えと共に直線に近いものになり、昭和七年（1932）鉄筋コンクリートの橋に架け替えられた時に失われた。

蛇行していた石神井川はよく大洪水を引き起こしていたので、現在の橋は、昭和四十七年（1972）の改修工事の際、新しく架け替えられた。コンクリート製の欄干は、わずかだが昔の太鼓橋をしのばすように弧を描いていて、木目模様が施されていた。橋の袂には、宿場時代の高札の面影を模した、正面（日本橋方面を向いて）に「距日本橋二里二五丁三三間」、左面（道に面している）に「日本橋から十軒六百四十二米」と記された、二メートル位の里程標柱が立っていた。



「板橋乃驛」(挿絵は友朋堂版より)

縁切榎

中山道板橋宿の薄気味悪い名所として旅人を怖れさせたのが、この縁切榎であった。いつのころからか、この木の下を嫁入り、婿入りの行列が通るとかならず不縁になるという信仰が生まれた。土地の人はもちろん、十代将軍に降嫁(寛延元年・1748)の五十宮、十二代将軍に降嫁(文化元年・1804)の楽宮の行列も、ここをよけて江戸入りをした。十四代將軍家茂に降嫁の和宮の時(文久元年・1861)には、この榎の根元から梢まで菰で包んだといわれている。当日この榎を避けて通り、岩の坂練馬道(富士見街道)より日曜寺門前を通り、愛染通りを経て、岩の坂下までを迂回して、中宿脇本陣に入った。

こうした信仰が生まれた原因については、初代の榎が榎の木と双生であったためこれをエンツキ(縁尽)と読んで縁切に通わせ、所在地の岩の坂をイヤナサカとしゃれて、「エンツキイヤナサカ」から出たという説。もう一つ、享保の頃、富士の浅間神社の信仰が厚い油商伊藤身禄が、富士の北側に道を開き、山上に屍を埋める心願をはたすため、別れをおしみ袖にとりすぎる妻子をこの榎の下でさとし、ひとり富士に出立したとの説がある。

初代榎は、明治十七年(1884)の大火に焼け、その後二代目の榎が繁茂していた。この榎の下に古びた祈祷所があって祈願者の相談、祈祷を行っていた。二代目の榎も切られて、明治の大火の際に焼残った枯木がその信仰対象となり、お詣の度に枯木が削り

取られるので、榎の前面には鉄柵が廻らされていた。この木片を煎じて相手に飲ますと効果があらたかとの説のためであった。

現在は三代目の榎が町の人の手によって植えられ、今も信仰を集めている。二代目は石碑に埋め込まれて境内にあり、焼残った初代の榎は、先ほど訪ねた観光センターに保存されている。現在、「縁切榎の絵馬」は、近くの「長寿庵」と「八百善」で販売されている。

探訪一行は、環状七号線に向かい、やや急に感じる岩の坂を歩いた。一行は、環状七号線に出会うと車の騒音で、現実の世界に引き戻されて、都営三田線の板橋本町駅に入って行った。

結語

新政府軍の本営が板橋宿に置かれた理由は、大きな川を渡る必要なく移動できる旧中山道の利点ゆえであった。今回の探訪で、改めて旧中山道の価値を知らされた。旧品川宿同様に旧板橋宿の現在の街並みは、人々の生活に密着したお店が多く、地域に溶け込んだ街の印象を受けた。又、旧板橋宿の東一帯が旧加賀藩前田家の下屋敷であった故に、加賀や金沢という名称が地名や学校名・公園名等に多く見られた。広大な下屋敷の敷地と石神井川の水利、さらに付け加えるなら都心からの利便性が、旧板橋宿一帯を幕末から維新・明治・大正・昭和と軍事産業の拠点とさせた。

現在は家が立ち並びその面影は見えないが、わずかに公園や街中にその遺構を見ることができる。僅か1.7キロメートルの旧中山道を歩いただけであるが、旧板橋宿が歴史の大きな流れに翻弄された様子が窺えた。

(本学教授)

Notes:

* 史実資料は、『いたばしの街道めぐり』、板橋区の『こうぶんしょ館電子展示室』等を参考にした。

i. 赤間倭子著『史跡探訪新撰組残照』（東京：東洋書院、1994）、pp.181-190.

ii. 吉村昭著『長英逃亡』上 文庫（東京：新潮社、1984）、p.174.

iii. 齋藤長秋編輯、長谷川雪旦畫圖『江戸名所圖會』第3巻（東京：友朋堂、1927）、pp.34-35.